

# 知るぽると紹介の島

このコーナーでは、「知るぽると」のことを楽しく紹介するよ。「知るぽると」の歴史や、大人気キャラクターの矢口(やぐち)家の秘密もいっぱい。4枚のパネルと10枚のポスター、そして宝箱。さあ、みんなで見てみよう！

## 「知るぽると」への道のり

—貯蓄・金融広報活動の担い手—

### ① 終戦直後

大蔵省、日本銀行が中心となり経済の再建のため「救国貯蓄運動」を展開。国民に貯蓄の大切さを伝える活動を行いました。



### ② 国民運動としての貯蓄運動の広がり〈昭和25年(1950年)〜〉

日本各地で自主的な貯蓄増強運動が高まり、地方貯蓄推進委員会が自発的に結成されました。



### ③ 民間団体をメンバーとした貯蓄運動の担い手として〈昭和27年(1952年)〜〉

各地の運動と効果的に連携し、民間の貯蓄運動の中心となる団体として、貯蓄増強中央委員会が発足しました。



### ④ 広報活動のさらなる展開へ〈昭和63年(1987年)〜〉

貯蓄推進運動から、貯蓄を含む金融全般に関する知識や情報の提供を中心とした広報活動に重点を移してきたため、「貯蓄広報中央委員会」と名称を変更しました。



### ⑤ より幅広い広報活動を目指して〈平成13年(2001年)〜〉

金融全般に関する広報または金融に関する消費者教育といった現在の活動内容に即し、「金融広報中央委員会」と名称を変更しました。「知るぽると」は、金融広報中央委員会の愛称です。「知るぽると」の「ぽると」とは港、入口という意味です。

貯蓄・金融広報活動の歩み

年月	事項	年月	時代背景
昭和		昭和	
4	政府が貯蓄奨励の全国的運動を展開	2	銀行法施行 金融恐慌
21	日本銀行に資金吸収推進本部（後に内規によらない貯蓄推進部となる）を設置	20	太平洋戦争終結
21	衆議院内に通貨安定対策本部を設置。都道府県に地方通貨安定推進委員会を設置 本部ならびに地方委員会の事務局は日本銀行本・支店に設置 日本銀行一万田総裁が「通貨安定・貯蓄推進」に関する声明を発表 大蔵省・日銀を中心に「救国貯蓄運動」を開始 —— 終戦後のインフレ抑制が目的 「貯蓄に関する世論調査」（第1回）実施		
25	各都道府県貯蓄推進委員会が相次いで発足		
27	貯蓄増強中央委員会発足（4月15日）—— 事務局は日本銀行貯蓄推進部 —— 初代会長に渋沢敬三氏就任 「貯蓄の日」（10月17日）制定		
28	勤労貯蓄の歌を募集、入選作の「ママのひとりごと」を発表	28	朝鮮戦争終結
29	2代会長に新木栄吉氏就任 3代会長に武井理三郎氏就任		
32	4代会長に岡崎嘉平太氏就任 貯蓄増強旬間運動		NHK テレビ放送開始
33	「貯蓄実践地区」を創設	31	経済白書「もはや戦後ではない」
35	「貯蓄推進員」を創設	35	国民所得倍増計画発表
37	日本銀行が「貯蓄推進だより」を創刊 「ゆたかなくらし」などテレビ放送を開始	39	東京オリンピック大会
40	<u>国民貯蓄30兆円突破</u> 民放テレビ「奥さま広場」番組放送開始（7局）	40	名神高速道路開通
43	<u>国民貯蓄50兆円突破</u> 児童生徒から貯蓄作文をはじめ募集、以後毎年実施	44	東名高速道路開通
46	<u>国民貯蓄残高100兆円の大台を突破</u> 国連主催の「発展途上国における個人貯蓄の増強に関する国際セミナー」（8月2日～8月11日、ストックホルム、参加国30か国のうち先進国11か国）に貯蓄増強中央委員会（以下、貯増委）事務局長が参加	47	沖縄本土復帰
48	「金銭教育研究校」を創設	48	第一次石油危機発生
51	韓国における国際貯蓄資料展示会への参加、協力のため貯増委事務局次長を派遣	53	日中平和友好条約調印 第2次石油危機発生
53	国連主催の貯蓄国際会議（アルジェリア国）に貯増委事務局次長を派遣	59	グリコ・森永脅迫事件
56	金銭教育研究校が全都道府県に普及	60	日航機墜落事件
58	活動の3本柱（「金融経済情報のサービス」「生活設計の勧め」「金銭教育の普及」）を決定	63	青函トンネル開通 瀬戸大橋開通
63	「貯蓄広報中央委員会」に名称変更 「金銭実践地区」を「貯蓄生活設計普及地区」に名称変更 「貯蓄推進員」を「貯蓄生活設計推進員」に名称変更	平成	
平成		平成	
9	ホームページ開設、パソコンによる生活設計診断の新システム稼働	1	消費税スタート
10	通信教育講座を開始	7	阪神淡路大震災
11	地方委員会の名称を「都道府県貯蓄広報委員会」に変更	13	米国で同時多発テロ事件 狂牛病発生
13	「金融広報中央委員会」および「都道府県金融広報委員会」に名称を変更	14	バイオフ解禁
15	「金融学習情報の提供」と「金融経済学習の支援」を両輪として活動を展開 金銭教育研究校制度を拡充（「金融教育研究校」および「金融教育研究グループ」を追加）	16	拉致家族5人帰国
16	金融広報中央委員会愛称を「知るぼると」と決定	17	郵政民営化法案成立
17	「金融教育元年」 —— 国民ファイナンシャル・リテラシー（金融に関する理解能力）の水準向上をめざし、金融教育の国民的な普及に向けて取組みを開始したこの年を「金融教育元年」と位置付けた	18	日銀がゼロ金利を解除
18	「金融教育プラザ」を設置 —— 金融教育の分野における調査・研究および各種事業の企画・実施を行い、金融教育の普及に役立つノウハウの蓄積および教育関係者の支援を行う		



救国貯蓄運動はじまる(昭和21年、岡山)



貯増委の第一声「独立記念講演会」(昭和27年) 壇上は渋沢会長



各地で金銭教育の研究(兵庫)

歴代会長紹介



【初代会長】  
**伊沢 敬三**  
 (しぶさわ けいぞう)  
 (第16代 日銀総裁)  
 就任期間: 昭和27年4月~29年4月

【民間による貯蓄運動の基礎を築く】

- 明治29年 東京生まれ(伊澤栄一の嫡孫)
- 大正10年 東京帝国大学経済学部卒業
- 昭和17年 第一銀行副頭取より日本銀行副総裁就任
- 19年 日本銀行総裁(第16代)就任
- 20年 幣原内閣の大蔵大臣就任
- 27年 貯蓄増強中央委員会会長就任
- 28年 国際電信電話(KDD)設立に伴い、社長就任

伊沢敬三は、昭和27年に貯蓄増強中央委員会会長に就任しました。当時日本銀行貯蓄推進部長だった増田常次郎氏が、一万田総裁の命を受けて会長就任の交渉に当たった際、伊沢は「君、見当違いだよ。ぼくは貯める方より使う方だ」と謙遜して受けなかったといいます。そこで増田が「しかし、伊沢さん、世の中はみんな分業ですよ。世間に貯蓄をすすめる人と貯蓄をする人があって、世の中分業が成り立つんです」と言うと、「うまいこと君はいうね」と最後は快く引き受けてくれたというエピソードが伝えられています。初代会長として、第一銀行副頭取、日銀総裁、大蔵大臣を歴任した伊沢が推されたことは、当時の関係者が貯蓄増強中央委員会の存在をいかに重くみていたかの証左といえるでしょう。伊沢は会長を務めた後、亡くなるまで顧問として委員会の活動に尽力しました。

こうした傍ら、若き日の柳田國男との出会いから民俗学に傾倒し、自宅屋根裏に収集した民具、郷土玩具等の標本は後に大阪万国博覧会跡地に創設された国立民族学博物館の母体となったとされています。また、自らも全国を歩いて資料を集め論文を執筆するほか、数多くの自然・社会・人文科学者を支援したとされ、昭和38年に亡くなるまでこうした活動を続けました。



【2代会長】  
**新木 栄吉**  
 (あらき えいきち)  
 (第17、19代 日銀総裁)  
 就任期間: 昭和29年4月~12月

【日銀総裁を2度経験、貯蓄運動を通して主婦の自主的な生活改善活動を支援】

- 明治24年 石川県小松町生まれ
- 大正5年 東京帝国大学卒業、日本銀行入行
- 20年 日本銀行総裁(第17代)就任
- 21年 日本銀行総裁退任
- 26年 東京電力会長就任
- 29年 貯蓄増強中央委員会会長就任
- 29年 日本銀行総裁(第19代)就任

新木栄吉は、昭和26年に東京電力会長に就き、駐米大使を経て、昭和29年貯蓄増強中央委員会会長に就任しました。同年12月、一万田日本銀行総裁が鳩山内閣の大蔵大臣に内閣した後をうけて、再び日本銀行総裁に就いたため、会長としての在任期間は8か月と極めて短いものでした。

しかしこの間、婦人団体との提携強化にともなって、主婦連主催「新生活全国婦人大会」および地区別「婦人教育指導者会議」を支援、さらには主婦連合会、全国地域婦人団体連合会、全国農協婦人部連絡協議会の各婦人団体代表者を貯蓄増強中央委員会の委員に委嘱するなど、主婦の自主的な生活改善、貯蓄活動を盛り上げることにつとめました。



【4代会長】  
**岡崎 嘉平太**  
 (おかざき かねへい)  
 就任期間: 昭和32年8月~46年3月

【全国津々浦々を自ら講演行脚し、貯蓄運動の重要性を訴えた】

- 明治30年 岡山県生まれ
- 大正11年 東京帝国大学法学部を卒業後、日本銀行に入行
- 昭和14年 華興商業銀行理事就任
- 17年 大東亜省参事官就任
- 18年 在中華民国大使館参事官就任
- 27年 日本ヘリコプター輸送(全日空の前身)副社長就任
- 32年 貯蓄増強中央委員会会長就任
- 36年 全日空社長就任

岡崎嘉平太は、一万田大蔵大臣、山際日銀総裁からそれぞれ貯蓄増強中央委員会会長就任の懇請をうけ、就任しました。会長に就任してからは、各報道機関との接触を深め、機関紙「ちよちく」の新開折込配布など大掛かりな広報宣伝活動を全国的に行ったほか、ヘリコプターやニュース・カーなどによる巡回宣伝も各地で頻繁に実施するなど、多様な宣伝活動を行いました。また、「できるだけ地方に出かけて、貯蓄を実行している人々に会って激励し、教えを受け、また、ほかで効果をあげている貯蓄実践の例とか、外国の例とかを伝えて、ここの農村に、あそこの農村に、いろいろな職場に、それぞれ貯蓄の実績があがるようにしたい」(日本経済新聞「わたしの履歴書」)との気持ちから、「相手がひとりであっても話し合い」をモットーに、自らが先頭に立って全国各地に意欲的に講演行脚に出かけました。岡崎の尽力によって、貯蓄運動面に大衆の意向が反映される素地が次第に作り上げられていきました。

またこの間、昭和36年から42年まで全日本空輸株式会社の社長も務め、日本の航空業界の発展にも大きな足跡を残しています。さらには日中の国交断絶時代には貿易の発展を通じて国交の早期回復を願い、日中覚書貿易の牽引役となってその実現に導きました。その交渉の責任者として北京を訪問したとき、周恩来首相と知り合い、それ以来、周氏と親交を結ぶようになりました。戦後訪中は100回ものぼるとされ、中国との友好関係の促進と確立に多大な功績を残したことはあまりにも有名です。

標語のいろいろ

貯蓄増強中央委員会のポスターに書かれている標語を年代順に見てみよう！  
これらの標語が書かれたポスターも見てね！

貯蓄増強中央委員会の発足前

通貨の安定を目的とした貯蓄運動の時代の標語です。

貯蓄で自立の力を養いましょう (昭和27年)



昭和27年から30年代初頭

国の経済の基盤を固めようとしていた時代の標語です。

お手もとの現金はとにかく貯蓄しておきましょう  
主婦の方は家計簿をつけましょう (昭和27年)  
みんなの貯蓄で自立の道を (昭和29年)  
今年も貯蓄で国の地がためを (昭和31年)



昭和30年代初頭頃から

国民のくらしや家計に焦点を当てた活動を始めた時代の標語です。

明るいくらしは貯蓄から (昭和31年)  
お隣も貯蓄しています (昭和32年)  
米や麦や繭などの代金はひとまず貯蓄しましょう (昭和32年)



昭和32年頃から

当時の経済情勢 (国際収支の赤字拡大など) を反映した標語です。

外貨危機突破 節約と貯蓄で (昭和32年)  
物やお金を大切に 資本の貯蓄へ (昭和32年)

